

「カンカー」
(シマクサラシ)

2019年12月以降、新型コロナウイルス感染症が中国湖北省武漢市を中心に発生し、瞬く間に全世界へ広がりました。感染経路や治療法などが確立していないことから、世界を震撼させ、私たちの生活にも様々な影響を及ぼしています。年明けから県内、村内のイベントも縮小、延期、中止が相次いでおり4月20日現在、日本国内での感染者数は10,751人、死者171人(厚生労働



富着のカンカーの様子

省発表)で、終息の見通しが立たない状況となっています。

沖縄タイムス(2020年3月18日)紙面で、新型コロナウイルスの鎮静化を願い、沖縄の伝統的な悪厄払いの儀礼「シマクサラシ」が琉球大学附属図書館で行われているという記事が紹介されました。提案した図書館職員も「沖縄にはこんな風習があることを知ってもらいたい」ということでしたが、シマクサラシという言葉自体、若い世代にはあまり聞き覚えのないものとなっています。集落によつて期日や名称が異なるなど、地域差があります。集落の入口に動物の骨や左縄を張ることで、悪疫の侵入を防ぐことを祈願した儀礼となつており、恩納村では主に「カンカー」と呼ばれています。

『恩納村誌』や字誌などでもカンカーについて記されていることが多く、名嘉真区では「村(大島)組新島組、浜組に分かれ、各々のカンカー毛で祈願。各組区の入口に豚の下アゴをしめ縄につるしきげ、悪疫払いをしたのであるが戦後中止された」とあります。

喜瀬武原区では「旧暦11月1日に部落で豚をつぶし、外の地域につながる道(中川、安富祖、名嘉真への道)に豚肉を備えて、悪疫が来ないように祈願した。豚肉は各家庭にも1斤ずつ配給され、仏前に供えた後食べた。戦後の一時期までであったが今はない」とあります。

戦前の恩納(太田・南恩納を含む)は7組に分



前兼久のカンカーの様子



拌みに参加した人に振舞う(前兼久)